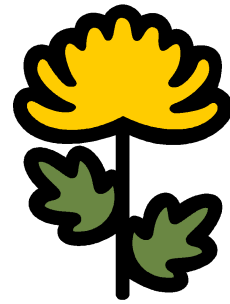


図書館だより



2018年（平成30年）
11月21日 ・ 木曜日

第11号 読書感想文号

北海道旭川永嶺高等学校
図書館

第63回旭川市児童・生徒読書感想文コンクールで、
本校から3人の作品が優秀賞に選ばれました。

佐藤陽南 2年3組 「夏の庭」を読んで
秋葉彩乃 2年5組 「羊と鋼の森」を読んで
山森怜愛 2年5組 「自閉症の僕が跳びはねる理由」を読んで

入賞おめでとうございます。
これらの優れた感想文を「図書館だより」に3号にわたって掲載しますので、ぜひお読みください。

「夏の庭」を読んで

佐藤陽南 2年3組

「死んだ人、見たことあるか。」
山下のこの言葉をきっかけに木山と河辺も人が死ぬ瞬間を見てみたいと興味を持ち出す。小学校最後の忘れられない夏が始まる。
私は死んだ人を見たことがない。お葬式に行ったことはあるが、顔は見るができなかった。どんな表情をしているのか、いや、表情はないのか。「死んだ人を見てみたい」という三人の少年の気持ちが私にも少し分かる気がする。
三人は人が死ぬ瞬間を見るため、近所に住むひとりの老人を観察し始める。だがそれは、老人と少年たちの深い交流へと姿を変えていくのだった。
私はなぜ一人の知らないおじいさんの観察から交流につながったのか疑問に思った。最初はコンビニのお弁当ばかり食べて、一日中だらだらとテレビを見ていたおじいさんが、料理をして、汚かった庭を片付け出す。こん

な風に生活が変わり始めたのは、誰かに見られていると勘づいたからだと思う。毎日一人ぼっちで誰とも会話せずに一日が終わる。こんな生活を何十年も続けていたから、誰かが自分に興味を示してくれていることが、新鮮で嬉しかったのだと思う。私も人に見られていると思うとついつい、はりきってしまう時がある。三人の少年のおかげでおじいさんがやっと人間らしくなってきたと思った。

数日経つと、三人はおじいさんのゴミ出しを手伝ったり、庭の草むしりをしてコスモスの種をまいたり、様子が変わってくる。でもそれは、決して嫌々しているという訳ではない。三人の気持ちも変わってきているからだ。いつの間にかおじいさんが好きだから、もっとおじいさんのことが知りたいから、という理由で家に来るようになったのだと思う。三人はそれぞれ家庭に様々な事情を抱えていたので、おじいさんと一緒にいた方が楽しく過ごすことができていたのかもしれない。

ある日、三人はおじいさんが戦争に行ったときの話を聞く。おじいさんは戦争中、お腹に子供のいる女性を殺してしまった。そして戦争から帰ってきても、奥さんの所へ戻ることはなかった。この時おじいさんがどんな気持ちだったのかは書かれていないが、きっと激しい罪悪感に襲われたのだと思う。そして何より、奥さんを家に置いて姿を消したことに後悔していたと思う。私なら辛い時は誰かにそばに居て欲しいと思うから、そんなことは絶対にできない。おじいさんは責任感が強くて一人で抱え込みやすい人なのかと思った。おじいさんが心に大きな傷を負ったまま、一人で暮らしてきたと思うと辛くなった。

三人がサッカーの合宿から帰って来ると、おじいさんはとても満足そうな顔をして亡くなっていた。おぜんの上にはぶどうが四房あり、きっと四人で食べようと用意してたのだ。

私も四年前に大切なペットを病気で亡くした。私が学校から帰って来ると、もう息をしていなかった。その日

の朝は、スポイトから水を飲んでいたのに。「もっと早く帰ればよかった。最後まで側に居てあげたかった。」と悔しくて悲しくてどうしようもなかった。三人もきっと私と同じことを思ったと思う。少年たちにとっておじいさんは家族同然だった。大切な家族が天国へ行く瞬間を見てあげたい、それは興味本位ではなかった。でも、その死をしっかりと受け止めて、自分は前へ進まなければいけない。それができれば、一步大人に近づけると私は思う。

「死」に対する興味から始まり、最後には「死」に直面した少年たちがそれぞれの道への一步を踏み出してこの物語は終わる。三人はおじいさんと出会って何を得たのか。それは、包丁の使い方であったり、洗濯ロープの張り方など、一人の人間として生きていくために必要なことだ。それと、ものの考え方。自分の枠に縛られずに、色々な視点から物事を見ることは大人になるにつれてより一層必要になる。おじいさんと一緒に時間を過ごすことで、三人の少年たちは大人に近づき、おじいさんは残り少ない人生を笑顔で精一杯生きることができたと思う。私はこの本を通して一番に人との出会いと大切さを学ぶことができた。出会ってずっと一緒に居られることが当たり前ではないと別れてから気づく。だからその時を大切に生きていきたい。出会いは奇跡なんだということを忘れずに、感謝して生きていきたい。そう思った。

今はお年寄りと交流する機会が少ない人が多くなっている。だからこそ私は、身近な祖父や祖母とたくさん話して、知恵や新しい考え方を身につけたい。そしてこれから待つ、一つ一つの出会いに感謝して素敵な人生を送りたい。私をそう思わせてくれる一冊の本だった。

秋葉綾乃さんと山森怜愛さんの作品は次号以降に掲載します。もうしばらく、お待ちください。